日本建築学会大会学術講演梗概集
（九州） 2007年 8 月

# 地域資源を活用したまちづくり教育活動の実践に関する研究

喜多方における地域資源を活かしたまちづくりの実践　その７

正会員　○吉田　拓*　　同　　野原　卓***
同　　永瀬　節治**　　同　　北沢　猛****
同　　鈴木智香子**
同　　鄭　一止**

まちづくり教育　　地域資源　　蔵
世代間交流　　喜多方市

## 1. 研究の背景と目的

我が国の中小都市における中心市街地の衰退は悪化の一途にあり、早急な対策が望まれているが、未だに決定的な解決策が見出されないまま、現在に至っている。

その一方で、これらの市街地では、それぞれ、地域の自然条件、歴史、生活文化等を背景とした地域の資源やポテンシャルを有しているにも関わらず、有効に活用されていない。

本研究は、地域資源である蔵を中心としたまちづくり活動の行われている福島県喜多方市を対象として、地方都市において、住民、行政、企業が一体となったまちづくりを進める上でのプロセスを確立するための手法検討を目的とする。中でも本稿では、喜多方市の中でも地域資源の多く残る小田付地域を対象として、地域資源の蔵を活用したまちづくり教育活動を通した、まちづくりの実践について扱う。

## 2. 喜多方市の現状とまちづくりの動き

会津盆地の北部に位置する喜多方市は、人口約 55,000 人の地方中小都市である。市内には 4,100 棟を越える蔵が存在し、「蔵とラーメンのまち」として全国的に知られている。

市内のまちづくりの動向について見てみると、住民が主体となったまちづくり活動が活発化の傾向にある。「喜多方蔵の会」「喜多方小田付郷町衆会」などの住民組織が各地に結成され、各区域のまちづくり熱の過熱に寄与している。

しかし、これらの活動は、市民の中でも一部の動きであり、全体としては、住民の蔵の保存補修を始めとしたまちづくりに対する意識は未だに十分とは言えない状況であり、実際に、毎年数棟ずつ蔵は消失してきている。そこで、蔵の保存を始めとした、まちづくりに対する住民の意識をさらに高めていく必要があると考え、蔵などの地域資源を活用したまちづくり教育活動（まちづくり塾）を企画し、実践した。

## 3. まちづくり塾のプログラム概要

### 3-1.地域まちづくりのフレームワーク

小田付地域では数年前に住民有志により、まちづくり組織である「喜多方小田付郷町衆会」が結成され、地域の蔵保存に対する活動が本格化して以来、当組織を中心に、シンポジウム、景観実験、景観協定締結の計画等の活動が行われてきた。それによりまちづくりに対する基本的な理解は徐々に得られており、またまちの課題及び将来像の共有もなされるようになってきた。現在はまちづくりにおける構想段階から実行段階へ移行しつつあり、構想を実現するための仕組みの模索と、そのために必要なより多くの住民の意識をまとめる段階に入っている。そのような中で当プログラムは、地域資源に対する意識を住民に植え付けると共に、まちづくりマネジメント手法確立へ向けての足がかりを築くことを目的とする。

### 3-2.まちづくり塾の目的

まちづくり教育を通した、地域資源の理解とまちづくり活動へのアプローチを促す当プログラムは、地域のまちづくり活動を促進するためのアプローチとして位置づけており、以下を目的とする。

① まちづくり教育による長期的なまちづくりへの理解
② 地域資源の有効活用
③ まちづくり活動の実践による周辺住民への波及効果

当プログラムは、中高生をターゲットとすることで、社会におけるまちづくり分野の重要性をより早い段階で認識させると同時に、地域の商店主などとの交流をプログラム内に取り入れることで、地域内における新たな交流が生まれ、地域の活性化にも繋がるなどの効果も期待できると考える。

特に今回のまちづくり塾の特徴は、地域資源を最大限活かしたまちづくり教育活動を行う点にある。授業の場所は喜多方小田付郷にある空き蔵（油屋）を利用し、課題設定も小田付地域内の蔵を対象とした。また、適宜小田付在住の商家または蔵の持ち主の方にインタビューを行うなど、地域を舞台にし、地域を題材としたプログラムとした。

### 3-3.プログラム詳細

プログラムは第一回から第五回まで設け、一回当たり土日二日間を用い、計 9 日間とした。第一回では主にまちを知っ

表１　プログラム概要

| | |
|---|---|
| 1．プログラム名称 | |
| まちづくり塾 | |
| 2．対象 | |
| 喜多方市内の学校に通う中学･高校生 | |
| 3．目的 | |
| ① | 若い世代に、まちづくりに対する興味を持ってもらう |
| ② | 空き蔵の活用など、地域資源を活用した教育を行う |
| ③ | 生徒と地元の人達との交流の場を作ることで、地域内の人的交流を促す |
| 4．開催場所 | |
| 喜多方市東町の渡辺家旧店蔵（油屋） | |
| 5．開催期間 | |
| 平成18年7月～平成18年12月（計9日間） | |
| 6．塾の流れ | |
| 第1回： | 開校式、まちを歩いてみよう！ |
| 第2回： | アイディアを描き、実際につくってみよう！ |
| 第3回： | 考えをまとめて、まちの全体像をつくってみよう！ |
| 第4回： | 展示会･発表会 |
| 第5回： | まちづくり講演会での発表･展示、卒業式 |

A study of practice in educational program of Machizukuri, using local resources
Practical research on MACHIZUKURI harnessed local resources in Kitakata, Part 7

Taku Yoshida, Setsuji NAGASE, Chikako SUZUKI, Ilji CHONG
Taku NOHARA, Takeru KITAZAWA

てもらうことをテーマとし、第二回、第三回では実際にまちに対する提案及び発表用のパネルや模型の作成、第四回、第五回は展示会及び発表会に当てた。

発表会及び展示会については、作業を行ってきた蔵（油屋）で地元住民を聴衆とした発表会と、まちづくり講演会における喜多方市全域の聴衆を対象とした発表会を行った。前者では地元住民を呼んで発表を行うことで、中高生と住民の方の交流を生むと共に、空き蔵を発表会会場として装飾することで、蔵の再生を地元住民に披露する場ともなった。後者のまちづくり講演会における発表では、聴衆が小田付郷の住民のみでなく、より広い範囲の住民を対象とした。

**3-4.地域資源の活用**

上述のように、この度の教育活動の特徴は、地域資源を最大限に活用した点にある。それは特に次の三点に表れている。

① 空き蔵の活用
② 地域を対象とした課題の設定
③ 地域住民に対するヒアリング

①空き蔵の活用については、小田付郷南町に立地する油屋（渡辺家旧店蔵）の活用を行った。当蔵は江戸時代に建てられた蔵であり、長い間物置として用いられていたが、今回のまちづくり塾に合わせて一般に使用できるような状態にした。

②課題設定については、生徒自身に自分たちの町を知ってもらうと同時に、周辺住民の方々の意識を高めることも考え、小田付郷内に存在する蔵の再生方法の提案を課題内容とした。

③については、発表及び展示会を、授業の場となった空き蔵において行い、地域住民の方を対象とすること、地域内に

図１　まちづくり塾成果パネル

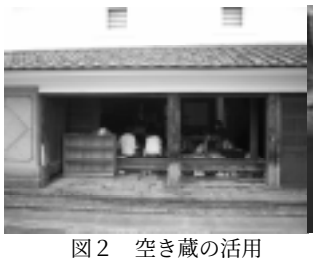

図２　空き蔵の活用

図３　まちづくり塾の様子

存在する蔵の見学をさせてもらうこと等で、地域住民の方々自身が講師となるようなプログラムを作成した。

## 4. まとめ：地域資源を活用したまちづくり教育活動の成果と課題

今回、まちづくり塾を開催するに当って得られた成果及び課題は以下の通りである。

第一に、学校の総合学習のような授業の範囲内では、限られた時間内に多岐に渡る事項を対象としなければならないため、まちづくりに割くことのできる時間は非常に限られている。そのため、正規の授業以外の時間にこのような学習を補足的に行う事は、意義のあることであると考える。実際に生徒からは、蔵についてこれ程時間をかけてじっくり見たのは初めてだという声が多く聞かれた。しかし正規の授業ではないためにどうしても生徒数の確保が難しく、教育活動はより多くの生徒に対して提供することでより効力を発揮することから、その点においては課題が残った。

第二に地域資源の活用について、今回のまちづくり塾では、授業及び発表会の場として、手軽に空き蔵を活用することに成功した。このことで、蔵の所有者及び周辺の住民に対して、蔵は手軽に活用可能であるということを示すことができた。また、実際に地域の蔵の再生を塾の課題内容としたことで、住民に地域資源活用に際してのアイディアを提供することもできたと考える。このことで、住民が地域資源に対しての意識を再認識するきっかけにもなったのではなかろうか。

第三に、発表会の場等において多くの住民の方々が話を聞きに来たり、ヒアリング先で様々な方と知り合うなど、一定の人的交流の促進効果はあったと考える。ただ、発表会に参加した方の多くは以前からまちづくりに興味を持っていた方が多く、まちづくりに対してあまり興味の無い住民の方の参加は少なかったことから、より多くの住民の交流を促し、まちづくりに対する意識を持ってもらうという点については、課題が残った。如何にさらに広範囲の人々を巻き込んだまちづくり活動ができるかが今後の課題である。

最後に、地域資源の活用という観点から考えると、このまちづくり塾の主催者は地元住民であることが望ましいと考える。その点において、今後このような活動を進めていくに当っては、如何に地元住民へと活動の主体を移譲していくかも検討すべき課題である。

*東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 修士課程
**東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 博士課程
***東京大学国際都市再生研究センター 特任助教
****東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻 教授

* Master Course, Dept. of Urban Engineering, faculty of Engineering, Univ. of Tokyo
** Doctor Course, Dept. of Urban Engineering, faculty of Engineering, Univ. of Tokyo
*** Research Assoc., The Center for Sustainable Urban Regeneration, Univ. of Tokyo
****Prof., Dept. of Socio-Cultural Environment, Grad.school of Frontier Sciences, Univ. of Tokyo